

発行人 ● 杉浦賢次 / 編集人 ● 蒔田純司

東京都港区芝浦3-2-22田町交通ビル2F / TEL(5444)0510 / FAX(5444)0303 / <http://www.rengo-tokyo.gr.jp/>

6度のパラリンピックで 金メダル3つ獲得したレジェンド

パラスキー・クロスカントリー

につ た よし ひろ

新田佳浩さん (株)日立ソリューションズ

6度のパラリンピック出場で、金メダル3つ・銀銅各1つの計5個のメダルを獲得した世界的なパラスキーアスリートの新田佳浩さん。小学校時代から始めたクロスカントリーのスプリント能力を活かして、高校時代からパラスキーに挑戦し、数々の輝かしい戦績で今ではパラスポーツ界の「レジェンド」とよばれる存在に。新田さんが挑戦し続けた背景には、多くの人々への感謝の気持ちが強力なモチベーションとなっていました。

祖父の喜ぶ顔が見たい！

家族への思いをモチベーションのベースに

——新田さんは、計6度のパラリンピック出場で、特にバンクーバーでは2つの金メダルを獲得されました。それまではずっとお爺さまの期待に応えることをご自身の支えにされてこられたそうですね。

新田 ● 3歳の時の事故を祖父は自分の責任であるとして、私のことをずっと申し訳ないと思っていてくれたようです。平昌パラリンピックに出場する前に一時故郷に帰り、小豆島の札所に参詣したことがあったのですが、そのお寺で何年も前に私の名前で御祈祷したお札をみつけました。幼いころに祖父と88カ所の巡礼に出かけた記憶があるのですが、どうやら小豆島以外の何カ所かの札所でも



写真提供：日立ソリューションズ 撮影：阿部謙一郎

新田佳浩さん PROFILE

(株)日立ソリューションズ(営業企画本部勤務)

1980年6月、岡山県生まれ。

岡山県立林野高校～筑波大学体育専門学群卒。

3歳の時に祖父が運転するコンバインに巻き込まれ左前腕を切断。翌年の4歳からスキーを始める。小学生時代からクロスカントリーに親しみ、中学校時代は全国大会に出場。高校時代からパラリンピックスキーをめざした。1998年長野パラリンピックに初出場。2002年ソルトレイクシティで銅メダルを獲得。2010年バンクーバーで2つの金メダルを獲得し、さらに今年の平昌パラリンピックで8年ぶりに3個目の金メダルを獲得。レジェンドと呼ばれ、日本を代表するパラアスリートである。今年5月、紫綬褒章を受章。家族は妻と7歳と5歳の息子が2人。

主な戦績

●パラリンピック

2002年	ソルトレイクシティ	5km クラシカル/銅メダル
2010年	バンクーバー	ミドル・クラシカル/金メダル スプリント・クラシカル/金メダル
2018年	平昌	ミドル・クラシカル/金メダル スプリント・クラシカル/銀メダル

同じことをしてくれていたみたいなんです。

パラスキーを始めて、世界で戦っていきける感触をつかんだ頃から、いつか祖父の首に金メダルをかけて「事故と障がいのは気にはしないでもいいよ」と言ってあげたい、それが競技生活の大きなモチベーションになっていました。祖父は2012年に他界しましたが、その2年前のバンクーバーで2つの金メダルを獲り、祖父に見せて首にかけてあげることができました。その前後には、祖父にとっては私のことが少しずつ責任を感じる存在から自慢の孫になっていたようで、孝行ができたことは本当に良かったと思っています。

——お爺さま亡き後の2014年のソチパラリンピックの際には、惜しくもメダル獲得はなりませんでした。大会後に帰国された空港で、息子さんから手作りのメダルを授与されていました。非常に感動的なシーンで全国でも話題になりました。

新田●祖父が亡くなった後は自分のために滑ろうと思って大会に臨んでいましたが、あのときの長男の出迎えは胸に染み

ましたね。「やっぱり人が喜ぶ顔をみるために頑張ろう」とあらためて思ったものです。祖父から与えられた「人の優しさ」や「思いやり」を今度は自分が子供たちに伝えていきたい。その思いを新たにしました。

当時、長男は3歳になったばかりでした。自分が事故で障がいをもったのが3歳と3カ月のときでした。あのときの事故の情景はいまでもその瞬間をはっきりと覚えています。3歳でも記憶は永遠に残る。だったら、自分の息子の記憶にも長くとどめる存在でありたい。強くそう思いましたね。

——平昌では見事8年ぶりにメダルを獲得されましたが、1つ目のスプリント種目では惜しくも逆転され銀メダルでした。

新田●最初のスプリントでは、途中までトップに立っていたのですが、終盤逆転されてトップに0.8秒及びませんでした。前年のプレ大会では逃げ切ることができず力を出し切ることができませんでした。1年たって、誰がスパートを掛けてもついでにいける第2・第3のエンジンの強化に取り組んできたのですが、今回はツメが甘かったですね。



とても熱心にインタビューに応じていただきました

スキー板は2本用意していて、予選と準決勝でより雪面にフィットした方を決勝で使ったのですが、決勝前に降雪があり、雪面が柔らかくなっていたことから難しい選択になりました。

次に出場した10km クラシカル立位では、スタート直後に転倒するというアクシデントがありましたが、とにかくレースが終わった時点で余力が残っているような走りは絶対にしないと決め、全力を出し切ることができました。終わってみたら2位に8秒以上の差がついていました。スタッフの懸命の声掛けやワックスの成功のおかげでした。チームのバックアップがなければ決して取れなかった8年ぶりの金メダルでした。

また、今回は混合リレーで4位に入ったのもうれしかったですね。団体種目には個人種目にはない格別の充実感があります。チームで戦っていることを実感できる素晴らしい成果でした。そして、忘れてはならないのが、会社の支援と社員の皆さんからの声援です。大変、心強く、大きな力を与えて頂きました。

小学校の担任の先生の勧めで始めた クロスカントリースキー

——新田さんがクロスカントリースキーを始められたのは小学生の時だとうかがいましたが、どういったいきさつがあったのでしょうか？

新田●事故で左腕をなくした後、親の勧めもあり4歳からスキーを始めました。中国地方の岡山県には本格的なスキー場がいくつかありまして、実家近くのスキー場で気軽に親しむことができたんです。

小学校3年のとき、担任の先生がクロスカントリーを熱心に勧めてくれました。その先生は元クロスカントリーの選手だった人で、「クロカンをやると人間として大きく成長できる。新田君もハンディに負けない強さを養うにはもってこいだよ」と言って、なかば強引にクロカンの道を開いてくれました。

ハンディに負けない体力には自信をもっていたので、負けず嫌いの性格も手伝って、子供ながら真剣に取り組んだものです。

中学生のとき、全国大会に出場しました。もちろん一般の枠で健常者の生徒と同じ試合でした。でも負けてしまいました。悔しかったし、ふてくされてしまったところもあって、負けた理由を障がいのせいにしたんです。「しょうがないよ」って。もうスキーはやめようと決め、それからしばらく競技から遠ざかっていました。

高校に入ってからのある日、東京から学校の校長室に私を訪ねてきた来客がありました。呼び出されて校長室に行くと、厚生労働省のお役人という人と、パラリンピックチームの監督だという荒井秀樹さん（現・日本代表監督）が待っていました。

私の中学時代の全国大会でスターターを務められた時に私のレースを観られて、「ぜひパラリンピックの競技にチャレンジしてみないか」と強く誘われました。パラリンピックがどんなものか実感がなかったのですが、熱心に誘ってくれたことと、校長先生から「君のためにわざわざ東京から来てくださったんだから、光栄なことだと思ってやってみなさい」と言われたのは大きかったですね。

ハンディを持った人同士が集まる競技なら言い訳はできないなという気持ちと、いま思えば「お爺ちゃんの喜ぶ顔が見られるかも」というのも動機につながったのかもしれない。

高2のとき、国内で初めて行われた冬季パラリンピックである長野大会に出場しました。それが本格的な競技生活のスタートになりましたが、まさかそれから20年後のパラリンピックも現役で出場し、金メダルが獲れるなど想像もしないレベルでしたね、当時は。

その後は筑波大学に進学して、本格的な競技生活に入り、卒業後、今の会社にお世話になり、ずっと競技を継続することができました。数えきれない方々のお声掛けと支えのおかげだと本当に感謝しています。

わが子の姿を通じて 自身の成長の在り方を自問

新田●昔は子供が悪いことをすると「目が見えなくなるぞ」と



写真提供：日立ソリューションズ 撮影：阿部謙一郎

か「口がきけなくなるぞ」など非常にネガティブな言葉で戒められていた気がします。今では障がい者につながるイメージであり、ちょっと使われにくい言葉ですよね。

そう思うと、今の時代は障がい者への偏見が徐々になくなってきたと実感しています。息子の幼稚園などを訪ねても、子供たちは私の腕を奇異の目でみることはありません。昔から常に「かわいそうに」という視線を感じてきたので、今の風潮はとてもよくなっています。障がい者にとって暮らしやすい環境が確実に進展していると思うことができます。

障がいを持つ人々が伸び伸びと生活できる環境社会を助長できるのが、パラリンピックだと私は思っています。

障がい者と社会の間に横たわり続けてきたある種の壁が年々低くなっているいま、2020 東京パラリンピックが多くの人々に気づきをもたらす大会となってほしい。そのためには、より多くの子供たちに大会を観戦してほしいと思いますし、できたら学校単位よりも家族で一緒に観戦する機会が少しでも多く設けられたら素晴らしいと思います。

私の息子たちは7歳と5歳になります。やはり子供の存在は大きいですね。祖父の喜ぶ顔を励みに頑張ってきたのが競技生活の前半でしたが、今は家族の存在が大きな励みであることに間違いありません。

子供の成長ぶりを日々見ていると、今の自分の成長速度はこれでいいのだろうか、よく自問自答しています。先日、長男の学校の公開授業で子供たちがシャトルランに挑むシーンがあって「お父さんが来てくれた」と張り切った長男は、最後まで一人だけ倒れるくらい走り、頑張る姿を見せてくれました。それを見て、自分はどうかの、と。子供を通じて自身をかえりみるのがよくあります。

人は本人がやりたいと思ったことをする時に一番力が出せるので、何をするのかは子供たちに選ばせたいですね。そのための機会は与えていきたいと思います。

私がパラリンピックをやろうと思った時、荒井監督が誘ってくれたときですが、パラリンピックの大会のVTRと写真を持っ



日立ソリューションズ、バックパネルの前で

てきてくれたんですね。迫力ある映像でした。一瞬で引き込まれたことを鮮明に覚えています。衝撃的でした。様々な障がいをもった各国の人々が限界まで挑戦する姿と驚異的な競技タイムは、私を動かしました。それまでの自分は障がいから逃げていた。負けた理由にしていたと自覚させられました。

自分で気づくきっかけを与えてもらえたことにありがたく思っています。

スポーツの価値と意義を パラを通じて広めていきたい

——さて、4年後には北京パラリンピックが待っています。レジェンドの新田さんとしては、当然目標とされていますね？

新田●それはまだこれからですね。もちろんパラリンピックと離れるつもりはありませんが、北京では選手としてか、指導者としてか、今後の過ごし方次第で決まってくると思います。

パラリンピックという障がい者スポーツという一つの枠でとらわれがちですが、現実には各競技の中でも視覚障がいの選手たちの団体、聴覚障がいの団体、知的障がい、四肢障がいなど、それぞれに競技団体が分かれていることはあまり知られていません。その意味では、まだまだオリンピックのほうが身近だと思います。

健康余命が100歳にもなろうとする現代です。パラスポーツの存在も社会に貢献できることが望まれます。スポーツの価値、意義をより広い視点から社会に広めていくためにも、パラスポーツの果たす役割は今後ますます大きくなっていくと思います。その社会の動きの中で、私自身が役立つことができればいいですし、そうあるべきだと考えています。

パラスポーツを通じて連合東京の組合員のみなさんとも交流する機会はどんどん増やしていけると思います。特に2020 東京パラリンピックにおいてはみなさんの大きなご理解が欠かせないでしょう。今後ともパラスポーツへの温かいご声援をよろしくお願いします。

